

第二次世界大戦以前の邦文文献にみる 韓国民家の地理学的研究の軌跡（Ⅱ）

— 岩槻善之（1924）の民家型分類とその周辺 —

佐々木史郎

Research Trends of Geographical Studies on Korean Folk Housing;
As Shown in Japanese Literature before World War II（Ⅱ）

—— Mainly on the Classification of Korean Local House Types by Iwatsuki (1924)
and Subsequent Arguments ——

Shiro SASAKI

I. 序言

1920年代前半は、韓国民家の研究にとって特に注目すべき研究が相次いだ時期である。この時期は第3代朝鮮総督・齋藤実（在任1919.8～1927.4）の下で推進されたいわゆる文化政治の時期にあたっており、さまざまな分野で官民にわたる学術調査が広く行われた。民家研究の領域では、建築工法や建築史、居住習俗などの研究とともに、地方民家の特徴について情報の収集と分析が進み、民家の形態・構造の地域的背景、地域差、分布といった視点からの研究が試みられた。それらの研究には、のちの文化地理学研究にも重要な示唆を与えたものが少なくないが、中でも先駆的な研究として注目されるのが、社団法人朝鮮建築会の機関誌「朝鮮と建築」に掲載された岩槻善之¹（1924）の「朝鮮民家の家構に就いて」である。

この研究は間取り型式を指標として朝鮮半島の民家をいくつかの地方類型に整理し、その背景としての地域的な諸条件を考察するとともに、各民家型の分布域を地図に示した最初の試みである。前稿（佐々木1998）でとり上げた今和次郎もこれに若干先んじて間取りの地方性に着目した論考を発表し（今1922・1923）、とくに1923年に「建築雑誌」に掲載された「朝鮮の民家（一）」の目次で

は、第Ⅲ章「間取り及それに就いての考察」の第1項に「一般型と北部型」をあげていた。しかし、この論文は第Ⅱ章までで終わっており、第Ⅲ章以下を記した続編は発表されなかったようである。結局、その部分を含む全体稿が発表されたのは、1924年、岩槻論文の発表後に刊行された『朝鮮部落特別調査報告』においてであり、今はその注で岩槻の分類案を紹介している²。

ともあれ、岩槻のこの試みは、のちに多くの研究者に引用されただけでなく、その内容に関連していくつかの議論を派生させた点でも、この時期の最も重要な研究の一つに位置づけられる。

本稿では、岩槻による地方民家の類型区分とその周辺の議論を中心に、分布・立地や地域差の解明、自然環境への対応の考察といった地理学的な関心を伴う研究の軌跡を、第二次世界大戦前の邦文文献から見ていくこととする。

なお、朝鮮半島全域が日本領朝鮮であった当時の邦文文献では、その地域名称としてすべて「朝

¹ 朝鮮総督府土木部建築課技師で、京城高等工業専門学校講師、朝鮮建築会理事も務めた。1931年没。

² 筆者は前稿で今（1923）と今（1924）が「冒頭部分を除き、ほぼ同一の内容である」と述べたが（佐々木1998）、1923年の論文はⅡ章までで終わっており、Ⅲ章以下は1924年が初出となるので、この記述は不正確である。ここで訂正しておきたい。

鮮」が用いられているが、本稿では第二次世界大戦後の諸研究を参照する際の統一性を考慮し、原則として「朝鮮半島」もしくは「韓国」と改めた。ただし、参照した文献に頻出する「京城」、「北鮮」、「南鮮」、「中鮮」、「西鮮」などの地方名称は、文脈上、そのまま原表記に従ったところが多い。

II. 岩槻善之による民家型分類の試み

1. 間取り型式の分類

岩槻自身の前置きによると、この民家型分類は、当時朝鮮総督府建築課技手であった朴吉龍³が半島各地で採録した資料を用いてまとめたもので、掲載された間取り図などの図版も朴が作成したものとされている。

この分類の骨子は、奥行き方向への部屋数、家屋の平面形の輪郭(屈曲の有無)、大庁⁴とよばれる板敷きの広間の有無や配置などによって、各地方の間取りの特徴が「北鮮型」、「京城型」、「中鮮型」、「西鮮型」、「南鮮型」の5種に整理されるというものである。これらを今(1924)が大別した「北部型」、「一般型」の2類型と照合すると、北鮮型は「北部型」に相当し、他の4種は「一般型」を平面形の屈曲の有無と板間の配置によって細分した形になっている。ただし、商家・旅館・飲食店などの営業的家構や都会地・新開地・開港場など交通煩雑な土地でみられる雑多な型の中には、これらの類型を適用できないものが多いとされている。

なお、この時点では済州島の民家の実態は研究者の間でほとんど認識されておらず、岩槻の分類でも言及はない。済州島民家の間取り型を半島本土の民家型とは別個の独立した類型として位置づけた見解があらわれるのは、後述する藤島(1925b)や野村(1938)以降のことである。

岩槻が指摘した上記の各類型の特徴をあげると、おおよそ以下ようになる。

北鮮型：土間の厨房と温突(オンドル)⁵の設備を施した部屋部分との間に仕切り壁を設けない。一定規模以上の家屋になると温突部屋を四つ目型(田の字型)に並べる。小規模農家では厨房の土間の一部に牛舎を設ける。咸鏡北道地方では舎廊⁶を別棟ではなく、主屋の一室に設ける。

京城型：京城(現ソウル)とその周辺に見られる型で、部屋はすべて一列に並べ、これをさまざまな形に屈曲させる。小規模住宅であってもL字形に曲げ、一文字に建てることは避ける。その屈曲部には内房⁷(主婦の部屋)をとる。また、3間以上の規模になると、必ず1間は大庁にして、これを南面させる。舎廊を設ける場合は主屋とは別棟にする。

中鮮型：だいたいの配置は京城型と異ならないが、大庁を欠くか、あっても南面させず、西向きか東向きに設け、その大きさも1間以上にはしない。内房は南面させる。

西鮮型：部屋を一列に並べ、棟を屈曲させることは絶対になく、一文字型にする。大邸宅であっても大庁は設けない。

南鮮型：西鮮型同様、部屋を一列、一文字型に並べる。大庁は重要な部屋として必ず南面させ、大きさも2~3間にする。

なお、岩槻は各類型の描写の中で、宅地内の建物・諸施設の配置やその間の通行のあり方、外部からの見通し、男女の空間的分離などにしばしばふれている。これらは間取り型分類の直接の指標として位置づけられているわけではないが、各地の住民の住居観や生活の様式を類推させる材料として盛り込まれたものと思われる。この論文の結

³1898-1943。1932年に朝鮮総督府を辞職後は建築家として活動し、朝鮮建築会の理事も務めた。西洋式建築の専門教育を受けた韓国初の建築家として知られ、京城帝国大学本部(1931年)、和信百貨店(1937年)などの作品を残した。

⁴「大庁(テチョン) マル」(대청마루)、または単に「マル」(마루)ともよばれる。

⁵朝鮮半島独特の床暖房設備「オンドル」(온돌)は岩槻の原文をはじめ、当時の邦文文献で「温突」と表記されることが多いが、「温突」という表記もある。室外の焚き口で火を焚き、その熱煙を床下に設けた数条の煙道に通して床面から室内を暖めるもので、類似の設備に中国北部の「カン(炕)」があるが、外見は異なる。

⁶原語の音は「サラン」(사랑)。主人の居室兼客間として用いる部屋。

⁷原語の「アンパン(안방)」を意識した漢字表記で、邦文文献で多用される。アン(안)は韓国語で「内、奥」、パン(방=房)は「部屋」の意

表1 岩槻(1924)以降の諸研究における民家型分類の対照表

	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(h)	(i)	(j)	(f)	(g)	(k)
岩槻善之 (1924)	北 鮮 型			—	西 鮮 型	南 鮮 型	—	—	京城型	中鮮型	—
野村孝文 (1938)	北 鮮 型			—	一 般 型		—	—	都 会 型		濟州島型
李 泳澤 (1965)	関 北 型			—	関 西 型	南 部 型	—	—	中 部 型		(南部型)
鄭 慶雲 (1972)	女真民族系田字式			—	漢民族系 單間並列型	南方系＋ 漢民族系	—	南方系＋漢民族系＋集團都市型			南 方 系
鄭 慶雲 (1974)	東北地方民家			—	西北地方民家	西南地方民家	—	東南地方民家	中部地方民家		濟州島民家
張 保雄 (1974)	山 地 型				平 野 型						島 嶼 型
					関 西 型	南 部 型	—	—	中 部 型		
張 保雄 (1980)	複 列 型				單 列 型						複 列 型
	五室型	四室型		特殊型 (側入型)	直 家 型			曲 家 型			複 列 型
		曲家型	直家型		二字型	一字型	中央厨房型	三 室 型			
李 俊善 (1992)	集 中 型 (一 棟 型)					分 離 型 (分 棟 型)					
	長 方 型			正 方 型	直 線 型			直 角 型			凹 型
	鼎厨間有	大庁無	大庁有		大 庁 無	大 庁 有					

※上欄の(a)～(k)は図1の各類型に対応

論部分には、時代に即した合理的な住宅改善を進める上で、平面や構造の研究、観察にとどまらず、住民の生活のあり方や心理を理解することが建築家にとって重要であるとの認識が述べられている。

2. 間取り型式の地方性に関する理解

岩槻およびその後の研究者が分類した各民家型とその分布は、表1、図1、図2のように整理されている。このうち、岩槻の論文に掲載された各図には、参照した間取りの採録地点が具体的に示されていない。また、岩槻自身もこの類型区分や地理的分布が概略的なものと付記しているように、分類基準や分布境界を実証的につめたものではなかった。したがって、その後の諸研究で補正・修正が試みられた箇所も少なくない⁸。しかし、それらの研究がいずれも大筋において岩槻案の輪郭を追認する結果になっているのは、岩槻の分析の妥当性ととも、そこで参照された朴吉龍の調査精度の高さを物語るものといえる。雑誌「朝鮮と建築」の記事を通覧するかぎり、この時の朴の調査資料は彼自身の著作(朴1938、1940、1941など)にほとんど反映されていないが、岩槻の研究に参照されることで、その後の研究に大きく寄与した

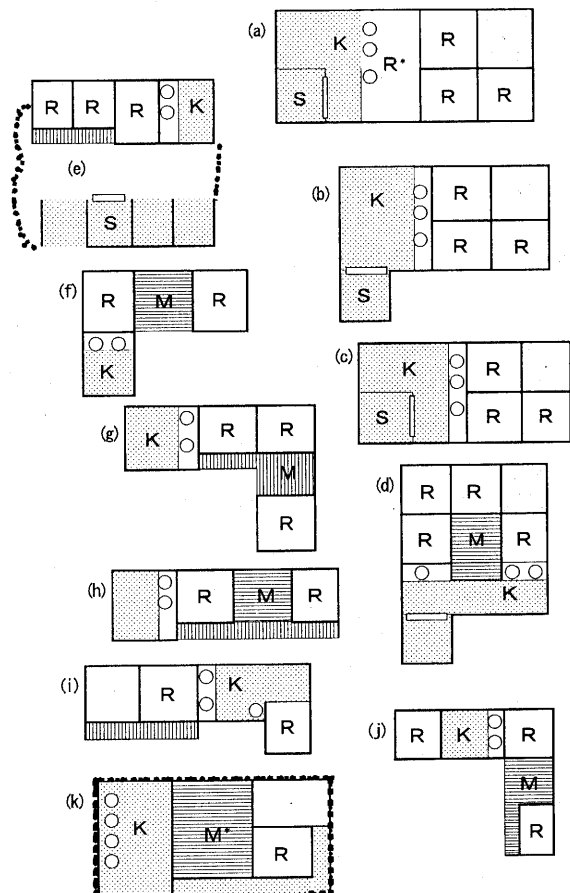


図1 朝鮮半島における地方民家の間取り型模型図

R: 温突房 (a) の*印は咸鏡道地方の鼎厨間、K: 厨房、S: 牛舎、M: 板間(大庁、抹楼)。(k) の*印は済州島民家の床房)、
 ☒: 納戸・物置

⁸たとえば、北鮮型間取りの分布南限の見直しなど(張1974)。

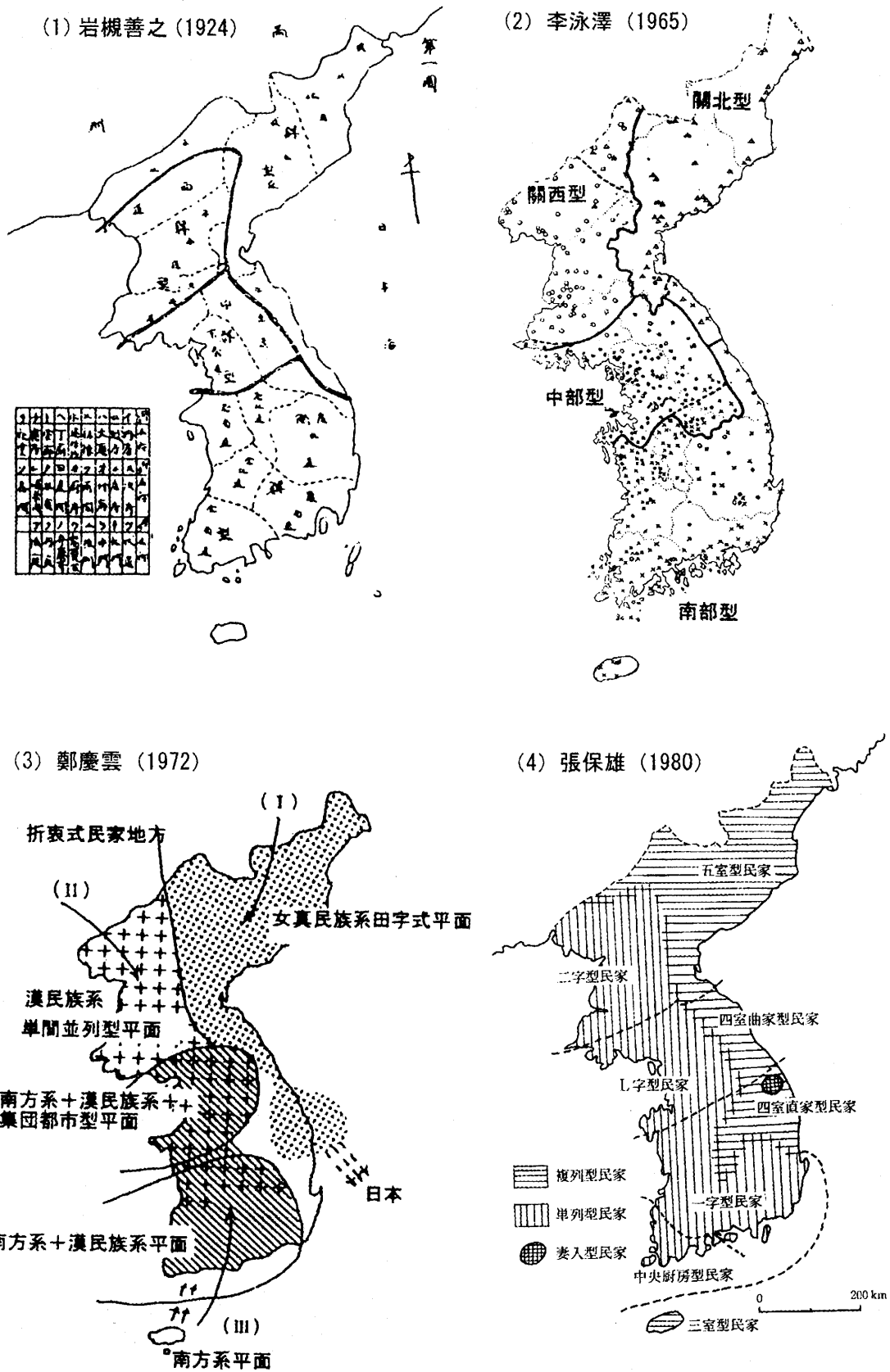


図2 岩槻 (1924) 以降の諸研究における民家型分布図

ことは認識されてよい。

岩槻は民家の特徴に影響する諸要素として、「地理、気候、材料等、其の土地固有の自然」、「其時代及民族の個性、思潮、風習、宗教、政治等」、「貧富の程度、趣味等」を列挙している。そのうち、朝鮮半島各地の間取りの地方性を解釈する上で、岩槻が特に着目しているのは寒暖の差である。なお、ほぼ同時期に韓国各地の地方民家を調査した地理学者の小田内通敏(1924)は気温や降水の多寡など自然環境との関係についてほとんど言及していない。小田内はそうしたことがすでに自明とみて記述を省いたのかもしれないが、建築学者による初期の韓国民家研究の中では、気候条件やその土地に産する建築材料などが主要な着目点の一つとなっている(佐々木 1998)。

岩槻が寒気の厳しい北鮮地方と比較的それが弱い南鮮地方の違いに着目し、前者の間取りが「著しくコンパクト(集团的)」であるのに対して、後者は長屋式に部屋を多数一列に配置し、廊下で連絡するという対比を示したのは、この分類の基調をなす認識である。また、北鮮型の間取りにおいて、小規模農家が牛舎を厨房と一緒に設け、その境界を壁で仕切らずに貫(ぬき)を一本設けるだけにしている点、夏季の居間に使用する大庁とよばれる板間が南鮮地方に多く発達している点なども、間取りに現れた気候の影響の具体例として挙げられている。

III. 岩槻の民家型分類に続く議論

1. 「南鮮型」の概念に関する村田治郎の問題提起

岩槻(1924)と同じ年の「朝鮮と建築」誌上に「スケッチ」と題した村田治郎⁹の民家観察記が3回にわたって掲載され(村田 1924a、b、c)、さらに翌年には「南鮮民家の家構私見」と題して新たな三部作が掲載された(村田 1925a、b、c)。これらはいずれも岩槻の民家型分類をふまえた上での

所見である。

前者は第一部と第二部が慶尚北道の慶州および大邱¹⁰での民家観察、第三部がそれに基づく疑問と所見の提示となっている。第一部・二部は全体として軽い随筆風の体裁をとっているが、間取りと家屋内外の詳しい見取り図をともなった観察所見は具体的で資料性に富む。

たとえば、慶州での観察として、厨房の竈(かまど)後方の壁に隣室の温突部屋と連絡する戸口があるのを、「南鮮の民家によく見られる例」としているのは貴重な指摘である(村田 1924a、p. 17)。また、慶州で採録した間取り図の中に、厨房—温突—抹楼(板間)—温突の順に一文字に並べた典型的な南鮮型の間取りが1例含まれているが、この抹楼の前面が通例の大庁のように開放されておらず、壁と建具で塞がれている点は注目に値する。村田自身はこのことに特に言及はしていないが、この図はこの家の抹楼が夏季の生活に適した開放的な居間ではなく、閉鎖的な収納庫として用いられている可能性を示唆するものである。研究が進んだ今日でも、「南部地方で夏季の生活空間として大庁(抹楼、板間)が発達した」という趣旨の説明を目にすることが多いが、南部地方におけるこうした閉鎖的な板間の存在は、韓国民家への板間の導入過程を考える上で、一つの手がかりとなるものであろう(佐々木 1994)。

南鮮に属する大邱において、採録の対象となった3例の民家がいずれも南鮮民家の特徴とされる抹楼を欠いているとの観察は、翌年の「南鮮民家の家構私見」につながる重要な問題意識となった(村田 1924b、pp. 15-16)。なお、この村田論文にみられる「抹楼」¹¹という漢字表記は、一般に板間の総称として用いられる韓国語の「マル」(마루)を音訳したものであるが¹²、当時の邦文文献では、縁側や廊下等の小規模な板敷き部分は除き、部屋に相当する広さをもった板間、特に「大庁」とほぼ同義に用いられていることが多い。

「スケッチ」の第三部は「民家一憶説」と題し、岩槻の研究をふまえた上で、民家建築における地方性にあらわれ方について独自の所見を提示して

⁹ 当時、南満州工業専門学校教授。のちに京都大学教授などを歴任し、日本の法隆寺研究を含む東洋建築史の研究で多くの著作を残した。

¹⁰ 大邱(テグ)はもともと慶尚北道に所属し、その道庁所在地であったが、1980年に直轄市に昇格して同道から分離した。95年には広域市に改編され、現在に至っている。ただし、道庁は引き続き大邱市におかれている。

¹¹ 「抹楼」とも表記される。

¹² この漢字の実際の韓国語音は「マルル」(말루)となる。

いる。たとえば、岩槻が北鮮型とそれ以外の型との対比を防寒設備への顧慮の違いで説明したのに対し、村田は木材の多寡という要因を付け加えている。すなわち、木材の豊富な北鮮地方では奥行きの深い四つ目型の間取りにすることが可能であるが、木材の乏しい西鮮以南の地方では、部屋を一行に並べて奥行きを浅くしたという解釈である。この解釈には村田の任地であった旧満州での民家観察も援用されている。

また、西鮮型と南鮮型の類似については、歴史的に中国の文化的影響が強く及んだことを想定している。一方、中鮮型と京城型の屈曲型間取りについては、この地域が高麗・李朝期に政治的中心であった関係で、本来西鮮型・南鮮型と同類であったものが、のちになんらかの変形を生じたのではないかと推定している。

この「スケッチ」三部作をうけて、翌1925年に発表された「南鮮民家の家構私見」（以下、「私見」と略記）三部作は、岩槻の分類における「南鮮型」の見直しを迫る研究である。村田がこの「私見」第一部の冒頭で掲げている南鮮民家に関する考えは以下のように要約される。

- (ア) ある地方に多数存在するものをもって、その地方の定型とするならば、抹楼の存在によって規定される「南鮮型」は、南鮮の定型ではなく、例外的なものにすぎない。
- (イ) 南鮮民家の大多数は抹楼を欠いており、西鮮の民家と同型である。
- (ウ) 抹楼は妓生¹³の家、飲食店、宿屋等に多くみられ、かつ近年の新建築に多用される傾向がある。

村田は冒頭でこの見解を示したあと、南部各地の調査事例から自説の根拠となった事実を紹介するという形で論を進めている。村田自身の調査地域は忠清南道の大田（当時）¹⁴、全羅南道の木浦・

光州（当時）¹⁵、慶尚南道の亀浦・金海・東萊、慶尚北道の大邱などである。

これらの地域での調査を通じ、抹楼をもつ一文字型平面の民家が南鮮地方で数的な卓越を示す型ではなく、また、L字型平面と抹楼が、一般の農家建築よりは、営業的性格をもった特定業種の町屋の中に多くみとめられるとの観察結果が示されている。こうした都市部の家屋は、人の移動があり、また、富裕層の遊興の場となる機会も多いような土地に立地することから、都の中央文化の風尚にも影響されやすいとの認識である。

すなわち、抹楼は南部地方の気候条件の中で発達した要素というより、比較的近来になって中央（京城）から伝播したものと考える方が合理的であるとの立場である。この当時、京城地方でみられるようなL字型の家屋が次第に南鮮各地でも増加しつつあったのも、それと軌を一にする現象と村田はみている。

京城を中心に抹楼が普及した背景としては、南方、すなわち日本の中国・九州地方からの伝来と、北方、すなわち中国（原文では支那）文化と関係のある仏寺宮殿建築の模倣転用とが想定されたとした上で、村田自身は、後者の北方説に立った方が説明しやすいとしている。京城の宮殿建築や各地の客館建築などに見られるような板間の普及が、さらに京城の上流階級や地方の有力者の住宅に及んだとの解釈である。抹楼を南鮮地方の気候が生んだ独自要素とする見方については、その可能性は認めつつも、全体としては否定的な立場に立っている。それは、朝鮮半島が歴史的に中国文化の影響を受け続け、生活のさまざまな局面にその面影をとどめているため、抹楼だけを独創によるものとは考えにくいとの理由からである。

ただし、そうした中で京城に普及した抹楼がそこから北方（西鮮側）よりも南方（南鮮側）に多く伝わった理由としては、特に有力な説明材料を示し得ないため、暫定的に岩槻と同様、気候との関係をあげるにとどめている。

なお、村田は、自らの調査結果とは別に、朝鮮総督府の金世演による報告書から上記の大邱・東萊・木浦・光州に慶尚南道の密陽・晋州、全羅北道の群山・全州・南原、全羅南道の順天・羅州を加えた11地点の調査例を抽出し、一文字型とL字

¹³ 韓国語音は「キーセン」（기생）。芸妓の意。

¹⁴ 1989年に直轄市に昇格し、忠清南道から分離。95年に広域市に改編。1927年以来、忠清南道の道庁所在地。

¹⁵ 1986年に直轄市に昇格し、全羅南道から分離。95年に広域市に改編。1896年以来、全羅南道の道庁所在地。

型、抹楼のあるものとないものの比率を集計して、量的な検証を試みている¹⁶。しかし、その結果は、慶尚南北道は15例中、L字型が皆無、抹楼の有無の比は9対5なのに対して、全羅南北道は26例中、半数がL字型、抹楼のあるものが25例と、現地観察で得た村田の実感とは大きく乖離した数値となった。村田はその理由として、金世演の調査がおもに家構の大きい家を対象にしたため、大多数を占める小規模家屋の状況を反映しえなかったものとみている(村田1925c)。

2. 南鮮民家の抹楼をめぐる村田と藤島の議論

上記のような村田の所見が発表された直後、藤島玄治郎¹⁷(1925a)が別の見方を提示して村田の回答を要求したことから、両者の間で議論が交わされることとなった。藤島は当時、民家を含む済州島建築の实地踏査報告を「朝鮮と建築」に連載中であつたため¹⁸、朝鮮半島の南に位置する同島の状況をふまえて、南方文化の伝来を重視する立場からの発言となった。また、両者とも日本建築史に造詣が深く、中国建築の实地踏査も経験していたことから、これらの地域の古建築を視野に入れた広域的な比較と建築史学的な知見をもとに議論が進められた。ここでの藤島の主張の要点は以下のようなものである。

(カ) 村田が「私見」において抹楼の源流を求めている中国建築には板間というものがない。中国南部には多少板間がみられるが、北方にはないので、村田の「北方説」には賛同できない。

(キ) 日本も朝鮮も、初期の仏寺建築は板間を欠き、土壇または石壇上に石敷き、瓦敷きなどで建てられているが、時代が下ると板間が現れることから、仏寺建築の模倣転用

で住宅建築に板間が伝わったとは考えにくい。日本の住宅建築に早くから南洋系の板間の様式が確立され、それが仏寺建築にも取り入れられるようになったと考えられるように、朝鮮半島でも南鮮地方の住居で(おそらくは日本からわたった)板間が用いられはじめ、それが仏寺にも及んだと考ええるべきである。

(ク) 南の済州島では、極端な貧民家屋を除けば、どの民家にも中央に必ず抹楼(床房)¹⁹がある。この抹楼は温暖地である同島で古くから用いられてきた。南(日本)から朝鮮に伝来した板間は気候の関係から中鮮地方まで北上し、抹楼となって流行したが、済州島の板間はそれと同じ形になったもので、同島の隔絶性ゆえに、半島部での変遷には影響されずに、今日にいたっていると考えられる。

(ケ) 半島部では高麗朝以降、国都となった開城や京城で温突とともに抹楼が流行し、宮殿・仏寺や貴族住宅だけでなく、国都の風尚にならうことの多い中鮮地方の一般住宅でも使用されるようになった。しかし、富の程度の低い南鮮地方では、その後、冬の防寒を優先させ、抹楼が作られなくなったと考えられる。

(コ) 今日、南鮮で抹楼が増える傾向にあるのは村田の指摘するとおりであるが、それは、富の程度の向上に伴う二次的な流行であり、温突が優先される以前に板間を用いていた往時の再現と考えるべきである。

また、これに続いて、「朝鮮と建築」誌上に掲載された「済州島の建築」の第四部²⁰でも、済州島民家の板間(床房)の存在を指摘する際に、村田

¹⁶「南鮮住宅間取其他概要」および「全羅南北道主要都会の住宅概要」(いずれも1922年)

¹⁷1899-2002。京城工業高等学校教授、東京大学教授などを歴任。平泉遺跡群の建築史研究や民俗建築研究でも多くの著作を残した。

¹⁸藤島は村田との議論に前後して、「済州島の建築」と題した四部作を「朝鮮と建築」に連載していた。

¹⁹韓国語音では「サンバン」(상방)。張保雄(1974)はこの漢字表記を日本人による音訳ないし意識と考えており、本来の語彙は「居間」と同義の「サムバン」(삼방)だったのではないかとしている。なお、日本人にとって、この「床房」という表記は板敷きの部屋を連想しやすいが、韓国語の「サン」(床)には食膳という意味がある。

²⁰「済州島の建築」四部作のうち民家関係の内容を詳述しているのは、村田(1925d)の論評が発表される前号に掲載された第四部のみである。

との議論があったことにふれるとともに、板間の起原と伝来の経路について南方説にかかわる自説をやや詳しく展開している。

こうした藤島の所見に対する応答として、村田(1925d)は、「言って置きたいこと(主として藤島学兄へ)」と題する論評を「朝鮮と建築」誌に発表した。この中で村田は、藤島の批判が抹樓の発生起原の議論と近年の南鮮地方における抹樓の普及の方向についての議論とを混同したものである旨を指摘した。すなわち、村田自身は、南鮮における板間が南から漸進的に北に向かったというより、北(の京城地方)から南に向かったと解釈されるという意味で「北方から」とし、京城にあらわれた文化の源流を中国に求めたにすぎず、中国の中の北部・南部は問題としていないこと、板間そのものの発生起原を南方の暖国に求める見方には異存がないことを表明した。朝鮮における抹樓の起原としては、「南鮮人が自然に案出した」、もしくは「支那日本の影響又は暗示があった」という二通りの可能性を指摘している。

また、近年、南鮮地方において抹樓が増加しつつあるのは「二次的流行」だとする藤島の所見は評価するが、「政治的中心地の風尚を模倣する心的傾向」に着目するという自説は固守したい旨を重ねて言明している。さらに、京城方面になぜ抹樓が多くあるか、済州島には抹樓が広くみられる一方で、なぜ、その対岸にある南鮮地方は、冬にそれほど寒くならないのに、温突が普及し、抹樓はなかったのかという点については、藤島の説明だけでは不十分との見方を示している。

両者の論旨を照らし合わせてみると、論点にずれがみられ、実際には共通の認識もいくつか内包しながら、議論がかみ合っていない箇所が目につく。ただ、「朝鮮と建築」の後続の号をみる限り、藤島の側からの再反論がなされた形跡はないので、この議論はこれ以上深められることなしに打ち切られたようである。また、両者の関心が民家様式の起原や系統、変遷など、建築史的な方面に向かったため、議論の重点が地方民家の位置づけをめぐる問題からは遠ざかった感がある。

3. 野村孝文(1938)の民家型分類

岩槻の民家型分類案をうけて展開された村田や

藤島の議論が一段落し、さらに済州島民家の実態がかなり明らかにされたあとで、野村孝文が改めて民家型分類を試みた。野村は朝鮮半島北半部を中心に間取りの採集を行い²¹、さらに当時の先行研究を参照して、「北鮮型」、「一般型」、「都会型」、「済州島型」の4分類案を提示した。野村はこれを岩槻、今、藤島の諸分類の折衷的なものと位置づけている。

北鮮型は岩槻の分類に準ずるもので、抹樓を欠くことと四つ目型プランをなすことを基本特徴とする。

一般型は各部屋を一字に並べる間取りをさす。この様式が北鮮地方と済州島を除く全域に共通することから、こう名づけたものであるが、これは今の分類による「一般型」の概念を踏襲している。岩槻の分類した南鮮型と西鮮型はともに一般型として共通の母型をもつもので、板間(抹樓)の有無で区別される。

都会型の設定は野村自身の新しい試みである。この型は京城型と中鮮型を一括したもので、都会地における敷地の制約で生じた曲家型平面の中に、宮室建築の影響で大庁を取り入れたものをさす²²。ただし、他地方の直家型都市住居や、中部地方の農村部における曲家型民家の存在には特に言及がない。

済州島型は、藤島(1925b)が済州島の民家型を独立した一つの類型としたのをうけて設定されている。この型は奥行き2間の直家型平面の一方の端に厨房、中央に床房(板間)をおき、他方の端には2つの部屋を前後に並べて配置するものである。藤島は、床房の存在、北鮮型に通じる四つ目型プランの変形、厨房から分離した不完全なオンドルという3要素をこの型の基本特徴としたが、野村自身は四つ目型プランをもつ文化との関係は薄いとみている。

²¹ 野村自身の調査地として、義州、新義州、定州(以上、平安北道)、安州、平壤、成川、鎮南浦(以上、平安南道)、沙里院(黄海道)、開城、京城(以上、京畿道)、釈王寺(咸鏡南道)、鏡城、会寧(以上、咸鏡北道)、慶州(慶尚北道)、大田(忠清南道)、釜山(慶尚南道)の16箇所を挙げている。ただし、所属道名は当時のものである。

²² この都会型という名称については、のちに張(1980)が京畿道地方の農村部におけるこの間取りの存在を挙げて批判している。

野村によるこの分類は第二次世界大戦前に提示された民家型分類としては最後のものとなる。ここでの野村の関心は、民家の地方的特色を理解するというより、間取り型式の系統や変遷の流れを考察することに重きがおかれており、各民家型に対応した分布図の提示もない²³。しかし、「済州島型」を独立させた点や「一般型」という概念を設けた点などは、のちに韓国の地理学研究者によっても評価されている²⁴。

IV. 民家類型とその指標の認識に関わる課題

上でみたように、韓国民家の地方類型区分に関する初期段階は、岩槻による分類案の提示に始まり、村田、藤島らの検討をへて野村の補足・修正にいたる流れの中で相当の深まりをみせ、一定の完成度に達した。第二次世界大戦後の諸研究において、新たな類型の発見以外に大きな変更点の提示がほとんどないことから、この時期の調査研究の精度と水準の高さがうかがわれよう。

ただし、上記の諸研究における議論の枠組みの中で、あいまいさを残した点がいくつか認められる。本稿ではそのうち2点を指摘しておきたい。

その一つは、広域的な分布事象の中から地方的な特徴を抽出しようとする際に、その代表性をどこに求めるかという点である。地理学的な関心のあり方として、「地域性の把握」という問題意識が常に伴うが、少数であっても同じ特徴を備えたものが、ある地域にはくり返し現れ、他の地域ではほとんど見られなくなるようであれば、そこに意味のある地域的傾向を読みとることは可能である。上で紹介した村田の議論の前提となった認識は、岩槻(1924)が「南鮮型」の分類基準として用いた「大庁(抹楼)のある一文字型平面」という指標が、当時の南鮮民家の大多数にあてはまらないというものである。村田の「私見」によれば、この地方で量的に卓越するのは、大庁を欠いた一文字型平面であり、そのかぎりでは「西鮮型」と区

別がないことになる。

しかし、ある地方の住居景観を特徴づけるのは、必ずしもその地方で最も多くみられる型とはかぎらないということを認識しておくべきであろう。現代の韓国にあっても、「草家三間」(厨房に温突部屋2間を一行につなげた草葺きの家)という語句がつつましい在来式の庶民住居を象徴する表現として認識されているように、「大庁を欠いた一文字型」という単純な形態は、かつて朝鮮半島できわめて広い範囲で共通にみられた型である。これは地方的な類型というより、地方的特徴が現れる前段階の基礎的単位とでもいうべき存在である。1970年代以降に韓国農村の近代化が本格化する以前は、L字型平面の卓越する中部地方や田字型間取りの卓越する北東部地方を別とすれば、この型が多数分布する中に、その発展形態として4間以上の規模の家屋が混在するのが一般的な住居景観であった。その場合、2間の温突房の間に大庁1間をはさんだ一文字型が現れるのが南鮮地方の特徴であり、中部以北にはその報告例がない。したがって、その型を南部地方の住居景観を特徴づける一つの標識的な定型とみなすことは十分可能である。初めにこの類型を「南鮮型」として設定した岩槻の説明にも不十分な点があったが、「ある地方に多数存在するものをもって、その地方の定型とするならば」という村田の前提も、地方類型区分の趣旨からいえば、議論を単純化しすぎた嫌いがある。

次に指摘しておきたい点は、朝鮮半島の南北の温度差についてである。

板間の存在をはじめ、気候条件の差と関連させて民家建築の地方差を論じる際に、韓国の南部地方、もしくは中部以南をいちがいに温暖地とみなすのは適当でない。8月の平均気温はソウル以南でおおむね25～26℃ほどとなり、東京や宇都宮あたりと同程度の暑さを示すが、最寒月である1月の月平均気温をみると、南部といえどもかなりの低温であることがわかる。たとえば、温暖化傾向にある現在の平均値でみても、大邱(北緯35度53分)が-0.2℃、光州(同35度09分)が-0.5℃、全州(同35度49分)が-1.6℃などであり、ソウル(北緯37度34分)の-2.5℃と比べて、それほどの大差はない。また、北鮮型の分布する東海岸

²³ 野村は1981年の著作で各地方の平面類型を地図に示しているが、これは第二次世界大戦後の韓国での研究成果を参照して作成したものと思われる。また、この図で分布の範囲や境界は示されていない。

²⁴ たとえば、張(1980、p. 43)。

の江陵（同 38 度 45 分）の 0.3℃ よりもむしろ低めといえる。北部に位置する平壤（同 39 度 01 分）の -6.2℃ や清津（同 41 度 47 分）の -5.7℃ よりかは確実に高いとはいえ、部屋数の限られた小規模家屋で、そのうちの一間を開放的な板間にするという選択は難しいほどの気温である²⁵。むしろ済州（同 33 度 31 分）の 6.3℃ との格差のほうが顕著である。済州島は温突が普及したのが半島南部よりも数百年遅く、温突導入後も板間主体の生活が維持されてきたし、温突自体の暖房能力も低い。

したがって、済州島を除けば、板間の有無を民家型識別の指標とする方法は、ある程度以上の家構規模にならなければ有効性を持ちにくい。その意味では、村田が批判した金世演の調査も、他地域の同一規模の家構と比較する場合は、それなりに資料的な価値を持ちうるものといえる。

V. 結語

岩槻が提示した民家型分類は、朝鮮半島の地方民家に対する理解と関心を高めるのに貢献したが、その成果は主として建築様式の系譜を問う建築史的研究に受け継がれていった感がある。地理学や民俗学の研究者がこの課題を継承し、文化地域区分や地域の文化生態の指標として地方民家の類型に注目するようになるのは、第二次世界大戦後に韓国国内での研究が本格化してからである。

1920 年代後半以降は、本稿で取り上げた岩槻（1924）とその関連の議論とは別に、特定地域の民家の諸特徴を観察した研究や家屋の材料・規模・外形などの地方差に着目した研究も現れているが、それらについての検討は次稿に譲ることとしたい。

文 献

（邦文文献）

- 岩槻善之（1924）：朝鮮民家の家構に就いて、「朝鮮と建築」3 輯 2 号、pp. 2-11.
- 小田内通敏（1923）：『朝鮮部落調査予察報告』、朝鮮総督府、
- 今和次郎（1924）：『朝鮮部落調査特別報告』、朝鮮総督府、
- 佐々木史郎（1984）：韓国車嶺山脈中部地域の民家、「地学雑誌」93 巻 4 号、pp. 12-30.
- 佐々木史郎（1994）：韓国民家における板間の性格とその地方性、「地学雑誌」103 巻 6 号、pp. 637-652.
- 佐々木史郎（1998）：第二次世界大戦前の邦文文献にみる韓国民家の地理学的研究の軌跡（Ⅰ）—岩槻善之（1924）に先行する諸研究を中心として—、「宇都宮大学国際学部研究論集」5 号、pp. 135-154.
- 佐々木史郎（2003）：朝鮮半島の民家型分類をめぐる諸研究と課題、朝倉敏夫編『「もの」から見た朝鮮民俗文化』、新幹社、pp. 25-40.
- 野村孝文（1938）：朝鮮住宅の一考察——敷地と平面に就いて——、「朝鮮と建築」17 輯 5 号、pp. 12-39.
- 野村孝文（1942）：朝鮮住宅の変遷の概要、「朝鮮と建築」、21 輯 10 号、pp. 1-8.
- 野村孝文（1980）：『朝鮮の民家』、学芸出版社、
- 藤島亥治郎（1925a）：抹楼の起原に就て村田さんの説を評し併せて自己の意見に及ぶ、「朝鮮と建築」4 輯 8 号、pp. 2-7.
- 藤島亥治郎（1925b）：済州島の建築（四）、「朝鮮と建築」4 輯 9 号、pp. 7-19.
- 村田治郎（1924a）：スケッチ（一）（慶州の家）、「朝鮮と建築」3 輯 9 号、pp. 11-18.
- 村田治郎（1924b）：スケッチ（二）（大邱の家）、「朝鮮と建築」3 輯 10 号、pp. 13-16.
- 村田治郎（1924c）：スケッチ（三）（民家一憶説）、「朝鮮と建築」3 輯 11 号、pp. 29-33.
- 村田治郎（1925a）：南鮮民家の家構私見〔一〕、「朝鮮と建築」4 輯 3 号、pp. 15-22.
- 村田治郎（1925b）：南鮮民家の家構私見〔二〕、「朝鮮と建築」4 輯 5 号、pp. 12-19.
- 村田治郎（1925c）：南鮮民家の家構私見〔三〕、

²⁵ 日本の 1 月の月平均気温は東京（北緯 35 度 41 分）で 5.8℃、宇都宮（同 36 度 33 分）で 2.1℃ となっている。

「朝鮮と建築」4 輯 7 号、pp. 32-39.

村田治郎 (1925d) : 言って置きたいこと (主として藤島学兄へ)、「朝鮮と建築」4 輯 10 号、pp. 1-6.

朴吉龍 (1938) : 温突の煙突に就いて、「朝鮮と建築」17 輯 1 号、pp. 22-26.

朴吉龍 (1940) : 朝鮮在来オンドルの構造、「朝鮮と建築」19 輯 3 号、pp. 14-20.

朴吉龍 (1941) : 朝鮮住宅雑感、「朝鮮と建築」20 輯 4 号、pp. 15-18.

(韓国語文献)

李泳澤 (1965) : 平面構造上으로 본 韓国の 家屋分布、「地理」1 卷 1 号、pp. 1-6.

李俊善 (1992) : 韓国民家の 類型에 관한 檢討、「關大論文集」20 号、關東大学校、pp. 753-773.

張保雄 (1974) : 韓国民家型式分類에 관한 試論、「師苑」(東国大学校師範大学) 3・4 号、pp. 45-51.

張保雄 (1980) : 韓国の 民家型分類와 文化地域区分、「地理学」22、pp. 41-58.

鄭慶雲 (1972) : 韓国民家에 관한 小考 (1) —— 平面構成으로 본 發生的인 考察과 分布相에 대하여 ——、「嶺南大学校論文集」5、pp. 183-190.

鄭慶雲 (1974) : 韓国民家の 基礎的研究、「東洋文化」16、嶺南大学校、pp. 71-119.

제 2 차 세계대전이전의 일어문헌을 통해서 본 한국민가의 지리학적 연구의 궤적 (Ⅱ)

— 이와츠키 (1924) 에 의한 민가형 분류와 그 주변 연구 —

사사키 시로오
(佐々木史郎)

[요약]

1924 년에 이와츠키 요시유키 (岩槻善之) 가 제기한 한국민가형 분류는 제 2 차 세계대전 이전에 나타난 한국민가의 수많은 연구 중에서도 특히 중요한 지위를 차지하는 선구적인 연구로서 그 이후의 연구에 큰 영향을 미치고 있다. 그는 박길용에 의한 전국적인 민가조사를 바탕으로 하여, 한국민가의 평면형태를 북부형, 서울형, 중부형, 서부형, 남부형 등 5 개 유형으로 구분하였다. 그 분류의 주된 기준은 일자형평면과 ㄱ자형평면, 홑집과 겹집, 마루(대청)가 있는 형태와 없는 형태 등을 구별하는 데 있었으며, 그러한 지방적 차이의 배경으로서 각 지방의 기후조건, 특히 추위와 더위의 정도를 들고 있었다. 이와츠키가 제시한 민가형 분류의 윤곽은 오늘날 여러 연구자들에게도 대략 인정을 받고 있으며, 그 당시 박길용의 조사가 상당히 높은 수준에 있었음을 짐작케 하고 있다.

이 분류에 있어서 이와츠키가 남부형 민가의 특징으로 일자형 평면과 마루(대청)의 존재를 들어 본 데 대하여, 무라타 지로오 (村田治郎 1925) 는 남부지방의 대다수 민가에 마루가 없다는 사실을 지적하면서, 중부이남지방 민가의 마루는 역사적으로 중국문화의 영향을 많이 받아 온 수도 서울의 중앙문화를 모방함으로써 남부지방에까지 전파된 것으로 추측하였다. 그러한 무라타의 주장에 대해 후지시마 가이지로오 (藤島亥治郎 1925) 는 제주도 민가에 반드시 마루(상방)가 있다는 사실을 들어, 온돌이 한반도 남부지방에까지 널리 보급되기 전에는 남방문화의 계통을 이은 마루중심의 주거형식이 중부지방까지 북상되면서 오늘날 흔히 볼 수 있는 대청마루와 동일한 형식으로 확립되었다는 가능성을 지적하고, 현대 남부지방 민가 사이에 마루를 마련하는 집이 점차 많아지고 있는 것은 그 이차(二次)적인 유행때문이라고 주장하였다. 그 후 민가형 분류와 그 계통에 관한 연구는 노무라 요시후미 (野村孝文 1938) 에 이르러 더욱 심화되었고, 또 한국민가의 지역적인 형태를 보는 시각도 풍토론이나 분포론적인 해석을 떠나 문화적 계통과 변천과정을 중요시하는 건축사학적인 특징을 지니게 되었다.

그런데, 그 당시 연구에는 몇 가지 미흡한 점을 지적할 필요가 있을 것이다. 그 중 하나는 지역적인 유형을 식별하려고 할 때 그 기준과 대표성을 수량적으로 대다수를 차지하는 형태에 찾을 것인가, 또는 소수 사례에 불과하더라도 특정된 지방에만 공통적으로 나타나는 특별한 요소에 찾을 것인가 하는 문제에 대한 검토가 등한시되었었다는 점이다. 또 하나는 제주도를 포함한 한반도 전체의 지역적인 기후조건, 특히 겨울 기온의 지역적인 차이에 대한 인식이 부족하여 남부형민가의 개념과 마루의 성격을 규정하는 데 있어서 적지 않은 혼란을 일으켰다는 점이다.